

アラカルト

漢字「鉄と鋼」をめぐって

Thinking about Kanjis, “Tetsu” and “Hagane”

牛窪 梧十
Goju Ushikubo

謙慎書道会 常任理事

古代王朝の年代確定作業を進めてきた中国の国家プロジェクトチームが四年がかりの総合的な研究の成果として、「夏」がBC2070年に成立、これがBC1600年に「商」によって滅ぼされ、さらにBC1046年に「周」が成立したとの結論に達したという。

王朝の成立ということはそこに文字の存在を想像させはするが、夏王朝にはいまだまとまった文字資料の発見はなく、われわれが使用している「漢字」の祖型は、商王朝後期の都跡である河南省安陽の殷墟から出土した多量の甲骨に刻まれた文字、いわゆる「甲骨文」ということになる。これは王朝の行動を決定するための神聖な占いの記録であり、亀甲や獣骨に毛筆で書かれた文字が刀（トウ）で刻りこまれることによって現在まで伝えられたのである。甲骨文には固有名詞などでいまだ解読されぬ字が多いにしても、字数としては五千字を超える文字の存在が確認されている。そしてそれは単なる象形文字ばかりではなく、漢字の造字法、使用法として説かれる、象形・会意・形声・指示・転注・仮借のいわゆる「六書」の全ての例が見出せるのである。このことから甲骨文は文字としての体系を完備した、かなり成熟した段階のものと言わざるをえないが、その記録方法が甲骨に刀で刻るという制約をもつため、書法の面からは直線的に単純化されており、その造形の自由さと刀意の真率さ以上のものは看取できない。

甲骨文と並行した漢字資料としては「金文」がある。祖霊を祀る儀式に使用されるさまざまな青銅製の器物に鑄込まれた文字、これが金文であるが、青銅器の製作は国家プロジェクトそのものであり、そこには祖霊への真剣な祈りが込められている。金文は鑄込まれたものなので毛筆の味わいがよく表現されており、ここに当時の人々の考えた漢字の理想的な美しさを見ることができるのである。

殷周革命によって周が支配者になると、この新しい王朝はその政治支配の重要な方法として、臣下の功績に対してそれ

を記念した文章を記した青銅器の賜与を行った。このために青銅器の製作はさらに盛んになり、青銅器上の文字もいっそう洗練された美しさを獲得し、ここに漢字書法史における第一の高揚期が実現したのである。これが今から三千年も前の事実であり、漢字の歴史の古さを実感せざるをえない。この時点では中国における鉄の歴史は始まったとはいいがたく、わずかに銅戈や銅鉞の刃部に隕鉄の使用が数例報告されるだけである。金文における金の字は青銅をさすことが多く、鉄・鐵・鋼などという文字はどこにも見ることはできない。

鉄という文字は、漢字典をみると「俗に鐵の字として用いるのは誤」と説明されており、おそらく鐵の字画の繁雑さを嫌い、失（テツ）の音を借りて使われたのであり、日常的な文書での使用はそれなりの歴史があるのであろうが、古来の書跡を集めた書道字典などでは一例も見出すことはできない。誤用から始まったものが戦後の漢字政策によってお墨付きを得たものであり、この字体が書の歴史に姿をあらわすのは何時のことになるうか。

後漢時代の許慎という学者によって編まれた最古の漢字字書「説文解字」によれば、鐵は「黒金なり」とし、その字形として三例をあげており、そのうちの鉄は古字であるとしている。いずれも形声字であり、金扁が金属を示し、戠（テツ）の音が黒色の意を持つという。赤黒い馬を驥というのも同じ理由である。鐵の書写されたものとしては睡虎地というところから出土した秦時代の竹簡の中に見えるものが古い。鐵の字形はずっと後にあらわれる書写体で、俗字である（図1）。

鋼は説文解字にその字形が採用されておらず、「鐵を鎔鍊して精熟なればすなはち鋼となる」という意味には、剛の字形をあてることになっている（図2）。しかし説文解字の岡の字形の解釈には疑問があり首肯しがたい。白川静氏の説では岡は鑄型を火で熱する形であり、鑄造の後にその鑄型を裂き器物を取り出す、高温に熱するので外型が焼成されて堅剛に

鐵 鐵 鐵 鐵 鐵

(説文) (説文) (説文) (秦簡) (説文)

図1 鐵の字形

剛 剛 剛 剛 剛

(説文) (甲骨文) (金文) (金文) (隸書)

図2 剛の字形

図3 銅の字形

なるので刀を用いて裂くのだという。甲骨文、金文の字形から導き出される解釈であり、こちらの方が説得力がある。銅の字形は遅れて六朝時代の梁の顧野王という人が説文解字を増補した「玉篇」という字書に見えている（図3）。

以上が鉄と銅という文字の成りたちであるがさして面白くもない話になってしまったのですこし飛躍した話題にうつりたい。

漢和字典の鉄の部には書にかかわる熟語としては鉄硯や鉄筆という語が見える。この鉄筆とはあのガリ版のためのものではない。明時代の後期から清時代にわたって盛行した篆刻（テンコク）という芸術、すなわち書画に使用するところの雅印を軟らかく美麗な石印材に刻るといふ仕事のための印刀のことを、「鉄筆」と呼ぶのである。篆刻はその面白さから多くの文人達が試みるどころとなり、高度な内容を持つ芸術として発展したが、その中に十八世紀半ば頃から浙江省杭州を中心に活躍したグループがあり「浙派」と呼ばれている。彼らは書画篆刻に通じ当時の芸苑をリードしたが、中でも秀れた八人を「西泠八家」と称している。

この西泠八家のうちのひとり、奚岡（1746-1803）は初めの名を銅といった。若い頃から画名が高く、科挙の試験を受けるための第一段階である童生であった時に、皇帝の視察をもてなそうとした長官が行在所の壁に画を描くことを強要したが、頑としてこれに應ぜず、怒ったこの役人は奚銅の名に掛けて、「汝は小僧のくせに童生どころではなくまさに鐵生だ」とののしったという。奚銅はそれを受けて鐵生を雅号とし、科挙から身を引いてしまったのであるからその反骨は筋

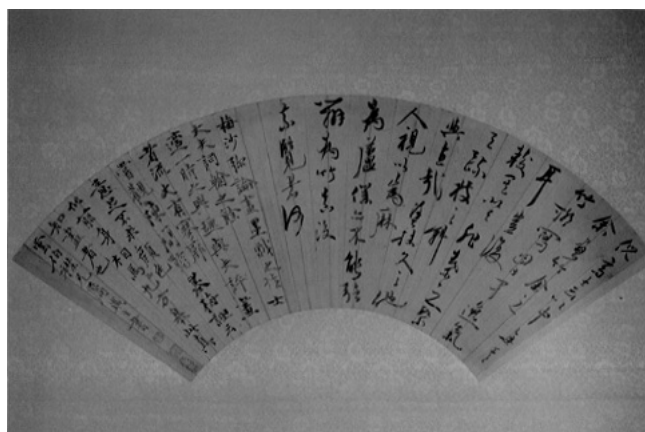


写真 奚岡書 論画二則扇面

金入りである。さすがに恥ずかしくなったのか三十歳頃からは名の方を岡と改めているが、生涯を通して権貴とは交わらず、書画篆刻を売って暮らしをたてた。酒を愛すること深く、酒狂の名もある。

掲載の写真の扇面は、前半の草書の部分は元時代の倪雲林の「論画」、後半の楷書の部分は呉鎮の「論画」を書いている。どちらも有名な画を論じた文章であるが、前者の「余之竹聊以寫胸中逸氣耳」という部分や、後者に引かれる「意足不求顔色以前身相馬九方臯」という詩はとくに知られている。

参考文献

- 1) 白川 静：字統，平凡社，(1984)

(2001年1月5日受付)